

◆(渚上陽一君) 新規就農者の確保と育成は、熊本県のみならず、我が国全体にとって極めて困難な問題であることは、だれもが理解するところであります。であればこそ、熊本県が全国に先駆けて画期的な制度を創設し、解決への突破口を示していただくというぐらゐの意気込みを持って取り組んでいただきますようよろしくお願いいたします。

2点目は、米粉の取り組みについてであります。

米については、これまで40年にわたり生産調整が実施され、今では水田面積の6割で主食用の米が賄える状態になっております。

加えて、今後の人口動向や高齢化の進展を考えると、主食用の米の需要が増大することは期待できないため、米の生産が制限される4割の水田をいかに活用するかは、今後とも本県の農業振興と環境保全を図る上で大きな課題であると考えます。

こうした状況のもとで、米粉ブームが起きていると言つてよいほどに、米粉を使った料理やお菓子に対する関心が高まっております。このブームの先駆けとなったのが、我が熊本県の高校生の研究であったことを御存じでしょうか。

それは、鹿本農業高校食品工業科の生徒たちであります。彼らは、平成16年に米粉パンの開発に取り組み始め、試行錯誤を繰り返しながら、地元企業の協力を得て見事に成功し、昨年は日本学校農業クラブ発表全国大会で日本一に輝くなど、高い評価を受けております。

また、彼らが開発したコメロンパンは、昨年8月の発売時には2カ月で3万個を売り上げる大ヒットとなり、今では、県内だけではなく、東京や神奈川のデパートでも販売されるほどの人気商品となっています。

私は、先日鹿本農高を訪問し、米粉パン開発の経緯を伺ってまいりました。そもそも、5年前、彼らに米粉パンの開発と普及に取り組むことを決意させたきっかけが、危機的な状況にまで落ち込んだ我が国の食糧自給率を上げるにはどうしたらよいのかという素朴な疑問であり、それについて調べていくにつれて、生徒たちは、1人が1日に食べる食事のうち、小麦粉食品約7グラム、ロールパン5分の1個を国産の米粉食品にすれば、食糧自給率は1%向上できるということを知るに至り、米粉パンの研究に取りかかったというのであります。

今や、国を挙げての大命題である食糧自給率の向上について、5年も前に心を痛め、そして自分たちの手で何とかしたいと決意した高校生の心を思うと、まことにありがたく、同時に頼もしく感じた次第であります。

休耕田の解消が農政の課題の一つとなっている中、米ならば作付できるという休耕田は多数存在するはずであり、この点において、米粉を取り上げた鹿本農高生の取り組みは、米の生産調整の着実な実施と農家所得の確保、さらには水田機能の維持という視点から、今後の水田農業振興対策を考える上で参考にすべき点が多いのではないかと考えられます。

そこで、4カ年戦略に掲げられた耕作放棄地、休耕田の解消による作付面積増加の目標を達成していく上で、米粉の振興について、県としてはどのように考えておられるのか、農林水産部長にお尋ねいたします。

〔農林水産部長廣田大作君登壇〕